

地方公益企業の乗取失敗と 関与銀行家の苦悩

— 篠山軽便鉄道を事例として —

小 川 功

I はじめに

資本力の相対的に乏しい地域社会の中で鉄道や電灯といった相対的に巨額の資本を必要とする社会資本がどのような性格の資金によって整備されたか、その過程で資金の仲介者である地域の銀行なり、銀行家等がどのような役割を果たしたかは、興味深いテーマ¹⁾の一つである。たとえば本稿で地域社会の好例として取上げた兵庫県多紀郡篠山町は大都市圏との距離がさほど離れていないにもかかわらず、交通網の整備の遅れもあって、地元固有の企業たとえば銀行、鉄道、電灯、新聞等が独立的に存在し、小規模ながらも地元資本家の緊密な連携活動の集積の場としての地元財界を形成していた。とりわけ銀行は『多紀郡誌』に「明治二十七八年戦勝後ノ事業勃興熱ニテ急ニ増シテ十五行トナル。其内ニハ名ハ銀行ニテ実ハ質屋同様ノモノアリ²⁾」とあるように、小さな地域社会の割に多くの銀行が乱立していた。そして大正・昭和初期に活躍した数人の代表的な人物³⁾はいずれも商人であり、共通する役職として、公職・名誉職等を除くと銀行役員と篠山電灯（篠電）役員という顔を持っていた。篠電は外部資本・才

1) 最近の研究では例えば赤坂義浩「大正期民営軽便鉄道の資金調達 — 京都府福知山北丹鉄道の事例 —」（『経営史学』30巻3号，平成7年10月）などがある。

2) 私立多紀郡教育会編『多紀郡誌』M44，p47

3) 代表的な経済人としては①「篠山町に於ける第一の富豪」（多p369）西阪熊太郎（醤油醸造業，大地主，137B頭取，篠電社長），②「篠山町で西阪氏と肩を並べる」（多p417）樋口達兵衛（金物商，137B専，篠電取，尼崎城内土地取），③小西竹次郎（篠銀取，篠電監），④「代々庄屋を勤め篠山藩の御用達」（現p21）齊藤幸之助（種油製造，篠銀頭，137B監，篠電監，篠山興信取），⑤米村文吉（古物商，郡議，町議，商銀専，篠電取，篠電専，日置銀行監）などがあげられよう。

4) 賀電機商会との提携・合併という形態で出発してまもなく、提携先の破綻に見舞われるなど、多少の混乱はあったが、持株が地元篠山の銀行関係者によって構成される一種のインナー・サークルによって継承され、その後は資本系統、経営ともに比較的安定し、銀行主導ではほぼ安定的に社会資本整備が継続された。その後も業績は大正12年上期～大正14年下期は配当率13%、大正15年上期14%、大正15年下期～12%で比較的安定していた。（電20回p961）

これに対して篠電との共通役員も多く、株主総会も篠電本社で開催するのを常とした、篠電（資本金60万円）に次ぐ規模の地元公益企業である篠山軽便鉄道（以下篠鉄と略）（資本金30万円）の場合はかなり様相を異にしていた。篠電と多くの共通点を持つ篠鉄は当初外部資本主導で設立されたが、ようやく地元資本に回帰した直後に、播州鉄道（播鉄）の主宰者たる伊藤英一（以下伊藤と略）という「兵庫県の鉄道王」によって株式をほとんど買占められ、かつ当の乗取り主体が破綻・失脚するという異常事態に遭遇、持株を引取り運営の主体となった地元銀行もその後に整理、破綻を余儀なくされるなど、その株主構成は幾多の変動を経たからである。戦前期発行の地元紙や紳士録の類を除けば資料も乏しい中小規模の私鉄である篠鉄に関しては幸い中川浩一氏、安保彰夫氏による先行研究⁵⁾で現物資産の詳細な情報を得ることが出来、『鉄道省文書』等の閲覧でお世話になった交通博物館の佐藤豊彦氏、車両メーカーに関してご教示を得た沢井実氏、篠山市立本郷図書館ともども厚く御礼申し上げたい。本稿の一部分は平成11年3月27日鉄道史学会例会で報告したもので、伊藤の本拠とした播鉄等の破綻に関しては別稿を予定している。なお本稿では紙面の制約上、対象時期の大正の年号、対象地の兵庫県・多紀郡の県郡名は原則省略し、⁶⁾ 頻出資料・社名・役職名等は略号で本文中に示した。

4) 才賀電機商会に関しては拙稿「明治末期、大正初期における生保の財務活動——電灯、電鉄事業への関与を中心として——」『生命保険経営』第48巻5号、昭和55年9月、p86

5) 中川浩一「失われた鉄道・軌道を調べるには」『鉄道ビクトリアル』140号、安保彰夫「篠山鉄道始末記」①～③『鉄道ファン』249～251号

6) 『鉄道省文書』（交通博物館所蔵）…文、『営業報告書』…営、『株主総会議事録』等…総、日銀総裁宛神戸支店長報告、『日本金融史資料 昭和統編』付録第三巻…日銀（うゝ

II 篠山軽便鉄道の略史

篠鉄の借方項目（資産側）の詳細な分析は両氏の研究に委ね、本稿ではもっぱら先行研究が言及されなかった貸方項目（負債・資本側）に着目するが、最低限度の略史だけをpushしておきたい。篠鉄は「電灯と姉妹の関係を以て軽便鉄道を敷設せん」（T4.9.15S）とした篠電を出し抜き、「坊ヶ内安治郎外六氏発起人となり資本金八万円を以て篠山町より篠山停車場に達する二哩四十鎖間に軽便敷設」（44.2.18R）を計画し、明治44年2月出願、44年6月12日免許、大正2年4月27日設立、4年9月12日（旧）篠山町（乾新町）～弁天（味間村大沢に所在する院線篠山駅）2哩4分（その後（新）篠山町まで延長し3哩11鎖4.9キロ）を軌間3呎6吋、蒸気（S10より瓦斯倫動力併用）、全線単線、軌重28封度で新規開業した。工事中の3年時点の資本金は8万円（1600株）、未払込株金は13,755円、社長は弘道輔⁷⁾、専高田虎五郎（M39は阪鶴相野駅長、国M38蒸p298）、取小山捨吉（岡野村、名誉職助役、村議、酒造業、営業税51円20銭、所得税150円78銭、工T3、ホp60）、坊ヶ内安治郎（有馬郡長尾村、発起人総代）、西阪熊太郎（前出）、監樋口達兵衛（前出）、小田中菊蔵（兵庫、T5.9

ㄨち、「篠山商工銀行ノ窮状」…窮状、『日本銀行調査月報』（『日本金融史資料・明治大正編』第21巻）…月、『本邦銀行変遷史』H11…遷、『大日本銀行会社沿革史』T8…沿、田中宗幸『現代多紀郡人物史 完』T5…現、畑貞一『多紀氷上人名鑑』篠山新聞社、S8…多、『篠山町七十五年史』…篠、『日本鉄道史』…鉄、『帝国鉄道要鑑』…国、『帝国鉄道年鑑』S3…道、『地方鉄道軌道一覧』…軌、『地方鉄道軌道営業年鑑』S4…方、逋信省電氣局編『電氣事業要覽』電氣協会、各年度…電、『全国株主要覽』、ダイヤモンド社…株、『銀行会社要録』東京興信所…銀、『日本全国商工人名録 全』…工、『日本紳士録』交詢社…紳、『帝国銀行会社要録』帝国興信所…帝、『日本全国諸会社役員録』…諸、『人事興信録』…人、木内英雄蔵版『兵庫県管内紳士録』M39…管、『兵庫県人名鑑』S11…庫、本郷直彦『神戸権勢史』T2…権、山内清溪『兵庫県人物列伝』T3…列、寺沢鎮『人物論・神戸の異彩』T9…異、『兵庫県銘鑑』神戸又朝日報社、S2…銘、『篠山新聞』…S、『神戸新聞』…K、『鉄道時報』…R、『大阪銀行通信録』…O、『神戸銀行史』S33年…行、篠山軽便鉄道・篠山鉄道…篠鉄、篠山電灯…篠電、播州鉄道…播鉄、播州水力電氣鉄道…播水、篠山商工銀行…商銀、湊西銀行…湊西、百三十七銀行…137B、篠山銀行…篠銀、頭取…頭、専務…専、常務…常、取締役…取、監査役…監、支配人…支

7) 弘道輔は大阪市東区、M32は阪鶴鉄道常、31年所得税15.1円紳5版 p1008、M38は阪鶴取（国M38 職p87）、東京芝区今里町77、大阪船渠取、京城商会取（銀T11 下p200）

篠鉄70株）、尾鼻作太郎（兵庫，T5.9篠鉄50株）であつた。⁸⁾社長の弘は阪鶴鉄道創立以来国有化まで一貫して重役の座にあり，専の高田虎五郎は阪鶴職員であつたから，紳士録・役員録等には見当たらない郡外重役もおそらく阪鶴人脈に繋がる人物でもあろうか。地元発起人の小山捨吉は土地の「人が至難として危みたる篠山軽鉄には自ら其渦中に投じて苦心惨憺」，「東奔西走以て三月末創立総会を開くに臨みては其取締役に挙げられ，爾来同社の事務を執り，漸くにして大正四年九月十一日開通式を挙げるに至らしめた…功績実に偉大なり」（多p181）と賞賛されている。小山は地元の老舗中核企業の篠山魚市場の統合にも関与した人物だから，篠山魚市場社長の小山竹次郎らを計画に巻込んだと考えられる。

有馬郡有志者連中はまず利権目当てに沿線の見込みある候補路線の免許を確保し「其後敷設権を売り付けん」（T4.9.15S）としたのを引受けた小山らが元阪鶴実務者に相談したのであろう。阪鶴着工時にも篠山周辺では「土地買収に際し，一部に反対の声強く」（篠p67）苦勞した土地柄なので，沿線有力者の小山らと阪鶴実務者は頻繁に接触したことには間違いなからう。篠鉄が地元にとって「降って湧いた様に計画された⁹⁾」との印象を与えたのはかかる創立の経緯に基づいている。5年9月（次節の伊藤による買占直前）の篠鉄資本金は8万円（払込済），借入金・当座借越金36,679円，総株数1,600株，株主数182名，20株以上の大株主は小山捨吉（前出）141（8.8%），樋口達兵衛115（7.2%），西阪熊太郎110（6.9%）で，上位3株主の合計は366（22.9%）で，以下西阪源三郎80，米村文吉76，小田中菊蔵70，富永亀吉60，堂本栞50，尾鼻作太郎50，奥谷浅太郎50，小西竹次郎50，楠本政治郎35，斉藤幸之助33，酒井玄三郎32，山川庸之助（大阪）30，中川辰次郎（大阪）25，山本淳吉（大阪）20であつた。（7営T5.9）役員は社長西阪熊太郎，専米村文吉，取小山捨吉，樋口達兵衛，小西竹次郎，監小田中菊蔵，斉藤幸之助となり，総辞職した前重役のあとを引継いだ地元銀行・篠電関係者で占められた。（帝T5p79）

8) 『鉄道電気事業要覧』T3，鉄道通信社，軽鉄p100

9) 『篠山町商工会発足八十年』平成3年，p31 所収

Ⅲ 伊藤英一派による買占と経営の変化

伊藤は「鉄道事業に対する関心が非常に強く、播州における民営鉄道網の完成をめざし…その後、播州地区を中心とした数多くの電鉄、軽便鉄道の事業計画にも参画¹⁰⁾したが、彼の評伝『神戸の異彩』は伊藤の猪突猛進ぶりの実例として「篠山軽鉄の乗取り¹¹⁾」を「新宮電車の買収」(T5/上期から6/上期にかけ播鉄系で大量に買占め)の次、「高野電車を陥れ、鬼怒川水電を攻略」(T6.12.27 伊藤鬼怒電取就任)の前に掲げる。決算期日ギリギリの6年9月25～30日の篠鉄小田中監、小山取(創立功労者)辞任(9営T6.9p2)も伊藤側へ全持株売却による役員資格喪失だと解すれば、「篠山軽鉄…伊藤英一氏外一名に対し売却」(T6.2.1S)かと速報された買占の仕上げ時期は6年9月頃と見られる。買占直後の6/9期の株主数はT5/9期182名から152名に30名も減少した。10株超株主(8営T6.9p15)は高見栄治(印南郡上荘村、国包銀行専、五成社監、龍野電気鉄道監)319(19.9%)、米村文吉(専)150(9.4%)、岸本信次(兵庫、T8.11 鬼怒電 1,000株、T9.5 鬼怒電 500株、伊藤のダミーか)132(8.3%)、岡田元三郎(町議、商銀取、篠山魚市場取、篠園自動車社長、篠山製菓用達取、後に篠電取)95(5.9%)、伊藤孝次(伊藤長男)63、富永亀吉60、松井新次郎(尼崎、伊藤製鉄取、朝日屋商店取)55と上位7株主で過半数を握っている。以下は小西竹次郎¹²⁾50、本岡武助(伊藤の腹心的存在の証券業者)50、末正盛治¹²⁾50、斉藤幸之助33、酒井玄三郎32、土肥又次(加東米穀取引所仲買人、社銀行監、小田銀行監)¹³⁾30、服部金夫(大阪)25、伊藤英三郎(伊

10) 『山陽電気鉄道65年史』昭和47年、p57

11) 前掲『人物論・神戸の異彩』p93

12) 西阪熊太郎に代って8年5月伊藤系を代表して篠鉄社長に就任した末正盛治は末正久左衛門次男で湊西専、「金穀物件土地建物貸付」(帝T8p120)を目的とする末正合資(後の六ノ坪合資)代表、篠電社長、神戸発動機社長、神戸取引所常監、伊藤の親戚筋で、「末正一門の柱石たるべき人物」(庫p225)と評された。末正の父・末正久左衛門は質商、大財産家、地主で、明治37年7月24日湊西代取に就任(行p249)、同行は「末正家一門を中心に経営され」(行p247)ていた。京都の山科伯爵家とも姻戚関係があるほど、末正家は「神戸市西部に於ける累代の名望家」(列p547)で、昭和3年10月設立の長久(株)には山科家言が取に加わっている。(S4銀p19)

藤次男) 21, 中西万次郎19, 今村勘造15, 酒井新太郎(町議, 眼科医) 13, 稲川正雄12, 羽田初太郎(篠山町立町, 金貸業, 煙草売捌業, 篠銀取, 丹陽社監) 11であった。実は1株株主中にも稲岡猪之助(播鉄支), 堀増治(鶴銀行取を経て西伊藤銀行取, 播州煉瓦監), 武田忠三郎(播州物産社長, 加古川化学工業専, 鮮満木材車両監), 黒田辛五(株尾野商店取, 播州物産取, 龍野電気鉄道取, 播州煉瓦取, 播州石材取, 赤穂鉄道取)など伊藤配下の主要人物が含まれる。

6/9期(半年間)の株式名義書換は133件851株(1件平均6.4件)で, 実に総株数1600株の53%が動いたにもかかわらず株主減は意外に少ないのは1株株主にも伊藤関係者を配して特定株主に集中させなかったためである。買占を内密に進めたい伊藤らがダミー株主を利用したためと推定される。5/9期との対比では持株を増やした米村文吉(76→150), 不変の富永亀吉60, 小西竹次郎50, 役員資格のみ維持した西阪熊太郎(150→50)以外は小山捨吉141, 樋口達兵衛115, 西阪源三郎80, 小田中菊蔵50, 堂本栞50, 尾鼻作太郎50, 奥谷浅太郎50らは全持株を売却した。

伊藤の買占後, 篠鉄は以下に述べるような積極策に転じて, まず資本金8万円(払込済)を一旦6万円減資した上, 新線計画等にあわせ「更ラニ資本金二十八万円ヲ増加シ…三十万円ト改メ新株五千六百株ヲ募集」(9営p14)した。「増資株金…は全部伊藤英一氏一派に於て引き受け」(T6.11.16S), 伊藤の長男孝次が新株5600株の72.5%・4060株, 残りも末正(社長), 本岡武助, 米村文吉(専務)の3名で500株づつ引受けた。(13営T8.9p13)伊藤孝次はダミー等に分散していた旧株の名義を自己に集中させ, 8/9期には総株数の68.6%を握り, 篠鉄を完全支配した。

篠鉄は6年時点では「未開業哩ナシ」「兼業ナシ」(国T7p44)と極めて消極的経営であったが, 伊藤による買占後には定款を変更して兼業として「電気器具製造販売, 農産加工製造売買, 信託倉庫, 土地建物賃貸借売買, 林業, 製材業」(軌S7p129, 道S3p398)など, 幅広く営めるように改正した。やたらと広

範囲な営業科目を羅列している所など、あきらかに伊藤流の播鉄多角経営に範を取ったものと見られる。¹⁴⁾

また「現在の営業路線は貨客取扱上不便多きを以て、起点より約二十五鎖の線路を県道の南方に変更し、起点駅を篠山町の中部に設置」(国T7p44)することとして10年2月15日篠山町の中心部たる東新町に(新)篠山町駅を設けて乗入れた。株主の伊藤定次は後年「回顧スレバ当初此鉄道ハ岡野村迄開業シテ業績不振悲境ニ陥ッタノデアリマス。此時末正社長ガ入社サレテ現在ノ篠山町中央ニ乗入工事ヲ完成サレ」(S18.12.30総、文)たと回顧している。乗入の前提として、さらに定款第2条の目的を「福知山線篠山駅ヨリ山陰線亀岡駅間ニ敷設」(9営p14)することに拡大するとともに、亀岡までのうちまず福住村までの福住線敷設を10年5月18日申請(20営p2)し、12年2月17日篠山町～福住村8.16キロ(蒸気、3呎6吋、建設費90万円)の免許を得た。¹⁵⁾なお篠山軽便鉄道は14年11月18日(26日登記)社名を篠山鉄道に改称した。

伊藤が政府補助金を受けながらも長らく無配を余儀なくされていたほど、収益性の乏しい篠鉄を支配したメリットとしては、世人が彼をして前述の「兵庫の鉄道王」と呼ぶのを幾分か促進したこと、彼の傘下にあった鉄道車両メーカーの伊藤鉄工所が最低限度1両の蒸気動車を篠鉄に納入させた程度かと思われる。伊藤鉄工所は7年2月に設立され、50馬力の電動機3台を持ち、大阪桜島の本社工場のほか、播鉄の所在する加古川にも分工場を有していた。¹⁷⁾篠鉄の保有車両は蒸機1、客車7、貨車5、計13両(道S3p398)末期でも蒸機2、客車6、貨車5、計13両程度にすぎず、その受注メリットは知れている。

14) ただしT14～S3の間には「土地建物賃貸借売買」の兼業のための「所有土地建物」勘定を毎期4.8万円計上するも、兼業成果の収入は雑収入1,200円前後しか見当たらない。

15) 『鉄道統計年報』T11監督p5。軌S7p129では篠山町～日置村6.0キロに短縮、建設費も48万円に減額、S10年版でも不変(p122)

16) 中川浩一氏によって「篠山軽便鉄道は大正7年度に蒸気動車を購入」(中川浩一前掲稿p75)したとされた車両に該当し、安保彰夫氏の調査によれば篠鉄の自社発注の蒸気動車の形式図には「製造所名伊藤鉄工所、製造年月大正七年十一月」(安保前掲稿①p116)と明記されている。

17) 工業之日本社編『日本工業要鑑』10版T8、機械p1(沢井実氏のご教示による)

IV 伊藤英一破綻と湊西銀行

10年4月30日姉妹関係にある播州水力電気鉄道（播水）の定時総会には実に奇妙な議案「第三号議案篠山軽便鉄道買収の件」が付議された。議長の伊藤播水社長は「当社株券ヲ以テ買収スルコトトシ、価格及時期ハ取締役会ニ一任ノコト」（T10.4.30決、文）と説明した。播水新株2950株株主の町田昇（伊藤商事監、総会直後の10年5月11日播水取就任登記 T10上営p3）は「原案ヲ左ノ通り修正センコトヲ動議」（同上）したが、修正動議の内容は「当社株券十分ノ五及社債十分ノ五ヲ以テ買収スルコトトシ、価格及時期方法ハ取締役会ニ一任ノコト。但シ社債又ハ株券交付歩合ノ変更ヲ為ス場合モ取締役会ニ一任ス。尚買収ノ暁ハ末正盛治氏及米村文吉氏ノ二名ヲ重役ニ選任スルコト」（決議録）であり、「修正案ニ満場意義ナク可決」（決議録）した。すでに伊藤一派が買占めて支配している篠鉄をおなじ伊藤系とはいえ、地理的に隔絶した播水が買収する意味が判然としないが、グループ相互間で大きな資産を架空売買して売却益を計上する“飛ばし”行為かと推測される。播水には現実に播鉄名義の九州の新延炭坑¹⁸⁾（廃坑同然で実質無価値）をも売付けようと画策しており、資金繰りに窮し関係会社を巻込んだ粉飾決算に狂奔していた伊藤の断末魔状態の現れとも理解される。14年に末正は神戸取引所の監として「今頃は伊藤氏関係の多くの会社の其れの如く当取引所は必ずや回復すべからざる哀れむべき災禍に見舞われて、株主諸君と共に之れが善後策に腐心せねばならない羽目に陥ったであろう¹⁹⁾」と篠鉄、播水のような「伊藤氏関係の多くの会社」が「之れが善後策に腐心せねばならない羽目に陥った」事実を明らかにしている。

伊藤英一破綻の「善後策」の一環として篠鉄は13年5月28日の定時総会で「貸借対照表中仮出金ニ計上セシ所有土地建物（鉄道用地以外分）ニ関シ、時価ヲ相当ニ評価シ、其差益金ヲ以テ預金回収不能金ヲ相殺為スルコトヲ専務取

18) 新延炭坑の権利関係の変動に関しては荻野喜弘、新鞍拓生両氏のご教示による。

19) 「演説原稿」「岸本家文書」2600番、布川弘「実業家岸本恒太郎の功績」桑田優編『播州高砂岸本家の研究』平成元年、p114所収

締役米村文吉ヨリ詳細説明セシニ満場異議無ク之レヲ承認」(T13.5.28決, 文)した。この点に関して『実用鉄道会計』の著者として高度な専門知識を有することでも知られる鉄道省監督局業務課佐藤雄能は次のような付箋を欄外の上に添付して注意を喚起している。「下記土地ハ大正八年頃伊藤英一氏カ私財ヲ以テ篠山軽便鉄道ノ名義ヲ以テ購入シ置キタルモノナリ。預金回収不能ノモノハ同シク同氏ノ経営ニ係ル銀行ニ対スルモノナリ。前記回収不能ト称スル預金は[二万円内外] 彼是仮出金トシテ計上セル土地[ト匹敵セルヲ以テ該土地ヲ] 返還スルコトトセハ債権債務ハ大部分相殺セラルルコトナルモ、会社ハ将来ノ発展ヲ予期シ土地処分ヲ欲セス、其仮之ヲ所有シテ整理セントスルモノナリ。何レニスルモ本件ハ地方鉄道会計規程第九条ニ抵触スルヲ以テ不可ナリ」

篠鉄提出の決算書明細によれば12/9期の預金27,166円は全額末正の湊西宛となっており、確かに同行相談役たる伊藤との関係は深いが、単に「同氏ノ経営ニ係ル銀行ニ対スルモノ」とはいえない。しかし何らかの複雑な事情が介在して、篠鉄としては湊西から回収できない（または湊西専務たる末正の立場では篠鉄に払戻したくない）込み入った事情があったものと推察される。鉄道省の意向に逆らっても、篠鉄が評価益を計上＝湊西からの預金回収の断念せざるを得ない事情があったものと思われ、末正の本業である湊西の伊藤関係の不良債権の処理と密接に絡んでいたことは間違いなからう。（たとえば湊西が伊藤に上記の土地購入を貸出した際に、篠鉄が手形の裏書、預金証書の担保差入等なんらかの保証行為をなしたなど）仮出金中の「鉄道用地以外土地」は21,178円であったが、この点に関して鉄道省の担当官は「大正十二年七月…土地建物評価額計上ヲナスコトヲ得サル旨通牒アルニ拘ハラズ之ヲ計上セルハ如何」と付箋を付している。このため12年5月18日の定時総会で定款の目的に「土地建物ノ賃貸借及売買業」(T12上営)を追加した上で仮出金から「所有土地建物」勘定を分離独立させ、14/3期にはこれを27,166円の雑損（回収不能預金）と同額の土地評価益を計上して相殺している。

「伊藤氏と姻戚関係に在る」(T11.12.1K) 末正の篠鉄持株がT8/9期565株から10/9期110に増加したのは、時期的な対応から支配株主の伊藤孝次持株

（T8/9期の4115株から10/9期1580株に激減）からの移転の一部と考えられる。古川俊（兵庫）が同時期に1000株の新規株主に踊り出たのも、仮に末正の湊西のダミー（S5取に昇格した古川巖副支の関係者）と想定すれば、伊藤の放出分を末正関係で引取ったことになる。このT8/9期からT10/9期までの時期は伊藤・孝次父子が失脚する時期に当り、伊藤への融資銀行等は先を争って債権確保に動き、担保の代物弁済による取得、財産差押、訴訟等が相次いだ。篠鉄4115株処分にもこうした各債権者の複雑な利害が絡んでいたと考えられる。湊西は主要な持株としては15年では営業上緊密な関係にあった三十四銀行200株（主T15p275）しかなく、非上場で銀行の営業エリア（神戸市内のみに本支店）からも隔絶した篠鉄株式の大量取得は湊西にとってもいかに異例で、不本意なものであったかを推測し得るであろう。

問題は末正・湊西側がなぜ魅力の乏しい篠鉄株を押さえたのであるが、可能性としては①湊西が従来から末正が社長を引受けていた関係から篠鉄株を担保として伊藤に融資していた、②「伊藤氏と姻戚関係に在る」末正としては他行のような素早い債権確保が出来ず、優良担保確保に出遅れた結果、流通性の乏しい篠鉄株あたりしか残らなかった、③篠鉄株を担保とする地元行の商銀あたりが共同経営を依頼したなどが考えられる。恐らく篠山の地元行以外の一般行は篠鉄株など見向きもしない中で、もともと篠電役員として篠山とは何らかの地縁関係ある末正が、やむなく個人的に引取ったのであろうが、その資金は当然に一族で経営する湊西から出す以外に策がなかったと考えられる。湊西の立場から言えば営業区域を遠く食み出した篠鉄に深く関与することは甚だ好ましくなく、世間体も悪いとの判断があり、引取った篠鉄株は一部末正名義とするするほかは極力ダミー株主を使って名義を分散してものと推定される。T12/3

20) 大正8年4月篠電社長末正盛治が「社務一切を主宰」（T8.4.26S）した結果、同一地域の電灯・電鉄を一挙に系列化して、電灯会社による電鉄会社への売電による稼働率アップをメリットとした旧才賀電機商会のように、篠電・篠鉄への末正・伊藤系の同時浸透には「軽鉄プラス電灯エクオール篠山電鉄の発現も近き」（同上）との地元の期待もあったが、むしろ過少設備で出発した篠電は「営業を開始し以来成績良好にて」（『電気大観』T5 p130）「供給戸数の増加と共に電力に不足を告げるに至ったので、大正五年十一月…（他より）受電」（篠p79）するなど、電灯・電鉄同時系列化のメリットは想定しにくい。

期に登場する50株ちょうどの無名株主，S2/3期に登場する100株ちょうどの無名株主はこうした湊西（ないし商銀等の地元行）関係者である可能性を秘めている。そうした目でみると100株主の沢村浅江は湊西の沢村虎造支店主任代理，50株主の小島金之助は小島荘兵衛取との類似性がある。その他六ノ坪合資（旧末正合資）社員の内藤茂も末正紀，末正治ら一族とともに篠鉄1株株主に登場している。こうした両行の名義借用株ならびに関係がある程度判明した篠鉄株主は〔表-1〕の通り。湊西の抱え込んだと想像される伊藤関連の不良債権がどの程度のものかを推測させる資料は乏しいので，その後の同行の動向から窺うほかはない。末正系が篠鉄株主に登場した11年頃，兵庫県の銀行界では合併の気運が高まり，「社銀行並ニ西伊藤銀行先ツ合併ヲ実行スルコトナリシカ，其後合併ハ其範圍ヲ拡大シ湊西銀行モ之ニ加ハル事ニ殆ト決定シ，更ニ東播銀行行モ近ク湊西銀行ト同一ノ態度ニ出ツルカ如キ形勢ナル由（神戸新）」（T11. 4月p467所収）と伝えられた通り，伊藤英一の機関銀行と見られる西伊藤銀行を，やはり伊藤系企業に関わりの深い社銀行が救済合併した。実現はしなかったものの，この構想に「湊西銀行モ之ニ加ハル事」が「殆ト決定」した背景には伊藤関連企業の破綻が尾を引いているとしか思われぬ。神戸市内の湊西と東播地方の郡部銀行との合併は地理的な必然性が感じられないからである。この合併構想が流れた後の14年8月「資産状態を堅実にするため」（T14. 80）湊西は100万円の資本金（払込52万円）を50万円に減資した。しかし減資後のBSでも312.6万円の預金規模に対して，有価証券33.6万円，営業用以外不動産25.4万円を抱えており，さらに諸貸付138.8万円（S4銀p5）の中に篠鉄株式等を担保とする末正一族への貸付等を含んでいるとすると，決して健全な内容とは言えまい。14年8月「頭取末正久左衛門氏<末正繁太郎が襲名>…常務末正盛治氏兩名カ無償提供」（T14. 8月）し，ことさらに株式会社としては異例な，末正家以外の「他ノ株主ニハ異動ヲ及ホサル方法」（同上）による変則的減資を敢行せざるを得なかった背景には，末正兄弟（繁太郎，盛治）が伊藤の密接なパートナーとして活動したという負い目からではなかったか。伊藤は最盛期には末正家の本拠たる湊西に対しても9年時点で筆頭株主末正繁

表-1 篠山軽便鉄道の主要株主の推移

株主名 (属性)	T5.9	T6.9	T8.9	T10.9	T11.9	T12.3	T14.9	S2.3
<伊藤系株主>								
伊藤英三郎 (伊藤英一の三男)		21	0	(未正へ)		(川端へ)		
伊藤孝次 (伊藤英一の次男)		63	4115	↓1580	1580	↓110	10	10
塩田半次郎 (兵庫)				↓1000	↓0			
木沢勝次 (神戸市, 神取60株)		1	0	0	1000	(*印へ分散?)		
本岡武助 (親密証券業者)		50	515	515	515	(×印へ分散?)		
高見栄治 (国包銀行専務)		319	0					
岸本信次 (鬼怒電1,000株主)		132	0					
松井新次郎 (伊藤製鉄取, 朝日屋取)		55	53	53	53	53		
土肥又次 (仲買人, 小田銀行監)		30	30	30	30			
藤井慎二 (西伊藤銀行監)			0	15	15	15		
<商銀・地元系株主>								
米村文吉 (商銀専)	76	150	550	550	550	*1100	↓900	906
川端伊之助 (商銀取, 投機家, 鬼電180株)			0		(孝次へ)取1000		1000	1050
高田九兵衛 (商銀, 薬商)	1		0		(孝次へ)取420		380	302
森本精一郎 (商銀監, 呉服商)			0		50	*50	50	
中道於兎次 (商銀取, 郵便局長)			0			*50	50	
小林治三郎 (商銀監, 篠山土地建物監)					×100		100	
岡田元三郎 (商銀取, 魚市場取)	95		0		×100		100	監102
小西竹次郎 (篠銀取)	50	50	50	50	50	50	50	
斉藤幸之助 (篠銀取)	33	33	30	30	30	50	50	50
鈴木平次郎 (篠銀専)			0				50	50
西阪熊太郎 (137B頭取)	110	50	15	15	15			
坂部啓之助 (篠山商事取, 神取30株)			0					50
篠山自動車			0					220
植村新之助 (篠山自動車常務, 篠山電鉄発)			0			*50	50	
<未正・湊西系と未詳株主>								
未正盛治		50	565	1100	1100	1100	1100	1100
未正 紀			0				1	1
未正 治			0				1	1
内藤茂 (六ノ坪合資)			0				1	1
未正合資			0				50	
小西閔三 (S15 湊西監, 篠電取)			0	(孝次へ)		*50	50	50
古川俊 (兵) (古川巖湊西副支関係?)			0	1000	1000	1000	1000	300
沢村浅江 (〃 (沢村虎造湊西主任関係?))			0					100
小島金之助 (〃 (小島莊兵衛湊西取関係?))			0					50
稲次浜太郎			0					100
三枝清太郎			0					100
金井要			0					100
合田貞一			0					100
岡野辰蔵			0					100
橋本武夫			0					100

(資料) 篠山軽便鉄道『第七回営業報告書』(大正5年9月) ~ 『第二十八回営業報告書』(昭和2年3月)
(交通博物館所蔵), 田中宗孝『現代多紀郡人物史 完』(大正五年), 畑貞一『多紀水上人名鑑』
篠山新聞社 (昭和8年), 『篠山町七十五年史』等により作成

太郎（湊西頭）9130株（総株数2万株の45.65％）に次いで、5000株（25％）を出資し、末正久左衛門（先代）と並んで相談役に就任していた。（T9銀p9）こうした因縁から末正は神戸取引所の株主総会で「自分は友人として伊藤氏に善意の辞任勧告」（T11.12.24K）を行ったと述べ、11年12月5日発足した「坪田、草鹿、藤尾、末正などと云ふ友人知己」（T11.12.6K）による窮地にある伊藤を支援する会にも加わっている。

篠鉄の他にも播鉄、新宮軽便鉄道、兵庫電気軌道、伊藤製鉄、伊藤商事、伊藤鉄工所などの数多くの伊藤の関係事業に重役・大株主として深くかかわって、同系への投融資など、「堅実」でない不良資産を発生させたため、伊藤の関係事業の破綻・整理が一段落した14年8月という時期に、同行の「資産状態を堅実にするため」、「全部同行経営者たる末正家」が“破綻銀行重役の私財提供”なみに極めて厳格な経営責任をとることを、自ら他の株主に明らかにせざるを得なかったためではなかろうか。この「他ノ株主ニハ異動ヲ及ホサル方法」による減資の結果、9年時点の上位株主（末正繁太郎9130、伊藤5000、末正1400株）の中で1万株を償却した後も、昭和3年末で末正久（長久株取、S18年湊西取就任）1500、末正盛治1000、末正照子1000の一族3名でなお3500株35％を占めた。（S4銀p5）こうした末正のけじめの一環として、昭和2年3月末正は一旦篠鉄社長を辞し、取も退任、相談役に退いた。2年3月末の役員は専米村文吉、取小西竹次郎、川端伊之助、監齊藤幸之助、岡田元三郎、相談役末正盛治となった。（28営S2.3）

V 篠山商工銀行の放漫融資と破綻

篠山の地元行のうち、篠鉄に関して湊西と同様な利害関係に立った篠山商工銀行（商銀）は篠山郊外の多紀郡城北村ノ内沢田村に明治30年12月16日城北農業銀行として設立され（遷p359）、大正8年時点では頭藤井善三郎、専小林亀治郎（篠鉄用地買収に尽力）、取倉垣幸之進、稲川市松、多幡治助、監安井五郎右衛門、竹内熊之助、井元鶴之助、倉垣永吉（元城北村長、後に商銀監）であり、資本金は3万円（払込済）であった。（沿T8p118）9年10月篠山商工

銀行（商銀）と改称，同時に所在地を城北村から中心部の篠山町立町に移転，12年12月24日城西銀行（M30.6設立，本店多紀郡北河内村）を合併して宮田支店とし，4万円増資した。（帝T13p9）さらに昭和3年6月には日置銀行（多紀郡日置村）を買収して日置支店とするなど，外観上は積極拡大の一途を辿っている。しかし改称時に主導権を握った川端伊之助は辰馬酒造への杜氏稼業から認められて台湾辰馬商会支にまで登り詰めたが，台湾時代に土地投機で財を成し，さらに大戦期に砂糖を買占め，「一躍数十万の富を握って帰郷，篠山商工銀行の設立されるに及び，多額の出資をなし，遂にその頭取に推さ」（多p379）れた人物と伝えられる。また商銀常の高田九兵衛（篠鉄取，篠山実業協会第二代会頭）も「三十年経済界の変調より株式場裡に白旗を掲げて，一時大阪に奔り，両替商及仲買業を兼営した」（現p36）とされ，伊藤の播水200株主としても登場する。大正バブルのまさに崩壊せんとする時期に，バブルで稼いだ資金を元手に，破綻した農業銀行から商工銀行への一大変身を目論んだのが商銀であったともいえよう。こうした改革路線を疾走した商銀には当然の帰結として篠鉄株式等を担保とする伊藤関係者への大口融資も発生したと推定される。佐藤雄能メモにあった「大正八年頃伊藤英一氏カ私財ヲ以テ篠山軽便鉄道ノ名義ヲ以テ購入シ置キタル」（T13.5.28総に添付の付箋，文）「貸借対照表中仮出金ニ計上セシ所有土地建物（鉄道用地以外分）」を篠鉄「会社ハ将来ノ発展ヲ予期シ土地処分ヲ欲セス，其假之ヲ所有」（同上）し続けた事実から，次の諸点が推測可能であろう。①8年頃には遠く篠山地区にまで，阪神間の土地熱が波及し，②現実に伊藤らの地域外の投資家が土地購入に走り，③伊藤への名義貸にもせよ，篠鉄自身も当事者として関与し，④鉄道と商銀とのトップを兼ねる米村文吉らは土地購入を是認し，⑤13年時点でもなお「将来ノ発展ヲ予期シ」続け，⑥大きな売却損を出す「土地処分ヲ欲セス」との不良債権問題の先送りをはかったなどである。

伊藤が篠鉄を買い占めた際に米村文吉だけが残留したことは，伊藤に抵抗したというより，「他郡人の力を借り」（T6.11.21S）たことを意味しよう。すなわち伊藤の買い占め行為等に対して，株式の売切りでなく，商銀は当該株式を

担保にとって関係者に融資をするという協力の方針をとったと考えられる。その状況証拠の一つとしてT11/11期の鬼怒川水力電気の株主名簿に兵庫県の川端伊之助（商銀取）が180株主として、13年3月末現在の播水の株主名簿に兵庫県の高田九兵衛（商銀常、篠鉄株取）が200株主として登場するのは、岡田元三郎が商銀「放漫経営」（S7.10.20S）の元兇と非難する川端や高田らが伊藤系の鬼怒電、播水という、銀行のエリアとは無関係な仕手株投資に関係したり、遠隔地不振私鉄の株式まで、掻集めて担保にしていたことを暗示するものと見られる。後に商銀の実情が暴露されるが、同業者の137B専の団野源三郎は日銀当局の聴取に対して「自分ノ見ル所ニテハ同行<商銀>ノ債権中ニハ到底優良ナルモノナク、強制処分デモナサザレバ換価シ得ザルモノ」（窮状S4.11.1, 日銀p366）と商銀の貸出債権の中身を酷評している。日銀でも商銀に対してはかなり以前から「予テ内容良シカラス、業績不振ニシテ屢々他行ヘノ合併モ噂ニ上リタルコトアル」（窮状S4.10.23）ため「同行ノ内容不良ナルコトハ既ニ久敷ク一般的ニ知レ渡リ居ルコト」（窮状S4.11.1）との厳しい見方をとっていた。商銀の貸出債権の中身を類推させる一例として篠山土地建物を挙げておきたい。土地ブームも過ぎ去ったはずの11年4月という第二次反動恐慌の最中に地元関係者によって、篠山土地建物（資本金5万円）が篠山町ノ内東新町に設立された。²¹⁾ 役員構成は商銀7名（*印）、篠銀2名（×印）、137B4名（#印）（商銀を後盾とする篠鉄兼務者（&印）も7名）であるが、社長、専を出した商銀に主導権があった。両支配人の経歴から、直前に破綻解散した篠山演芸など興業・娯楽関連の不動産抵当債権のなんらかの受皿かと推定される。同社の主導権を握った商銀こそが3行中で最も設立の必要性が高かつ

21) 社長* & 米村文吉（商銀専、篠電取、篠鉄専）、専* & 高田九兵衛（商銀常、篠電取、播水200株主）、取# 西阪熊太郎（137B頭、篠電取）、* & 川端伊之助（商銀取、篠鉄取、T11/11期鬼怒電180株）、# 団野源三郎（137B専）、×# & 斉藤幸之助（篠銀頭、137B監、篠電監、篠鉄監）、# 樋口達兵衛（137B専、篠電取）、* 中道於兎次（大山村、商銀取、大山郵便局長）、支 横田久吉（篠山演芸清算人）、岡田東三郎（同）、* & 岡田元三郎（岡田商店主、商銀取、篠鉄取、篠山魚市場取、篠園自動車会長）、監× & 小西竹次郎（篠銀取、篠電監、篠鉄取）、* & 小林治三郎（商銀監、篠鉄取、篠園自動車専）、小西記一郎（菓子商・洋服・小西商店主）、* 倉垣永吉（城北村、元村長、商銀取）（帝T13p98）

たとすれば、大戦景気中に放漫な不動産担保金融に走ったとがめが出たとも考えられる。実は137B専で、同社取の団野源三郎は昭和4年11月1日日銀神戸支店長に対して「篠山商工ニ対シテハ数年前同行ノ債権ヲ見返リニ重役個人保証ヲ取りテ十萬円計リノ融通ヲナシ、其残高現在尚四萬円ヲ存セリ」（窮状S4.11.1付日銀p366）と報告している。大正末期に既に137Bが同業者の商銀の資金難救済のため、「同行ノ債権ヲ見返リニ…融通ヲナシ」た先が、この篠山土地建物だと仮定すると、11年4月という時期の設立、商銀主導で137Bもお目付役として役員を出した理由がよく説明できそうである。なお篠銀と137Bとは「兩行間ニハ二三重役共通ノ關係モアリテ、其ノ内容良ク判リ居リ」（S5.2.10付日銀p366）との親密な間柄で最後は兩行は合併したほどであったから、篠銀も参加したものであろうか。篠山土地建物は昭和5年時点でも「篠山町東新町、資本金五萬圓、電話四〇」として土地建物売買業を営業していたが、商銀解散後の10年時点では該当がない。

同じ伊藤の取引金融機関の中でも、上場銘柄の鬼怒電、神戸取引所等の一流株を担保にしていた増田銀行、神戸取引信託らは漸次売却し、資金化できた。湊西と商銀の兩行だけが伊藤から篠鉄株式を引取り、役職員らの名義に替えて、流通性の乏しい株式という好ましからざる資産を不本意ながら長期間抱かざるを得ない状態を続けたと思われる。篠鉄の配当率は政府補助金のあった13年の8%をピークに、15/3期6%、15/9期5%、S2/3期以降3%と漸減している。それまで超低空飛行ながら低率配当をなんとか捻出してして来た篠鉄も昭和6年には15.3万円の借入金と12,204円の欠損を抱え無配に苦しみ、篠鉄株を実質的に長期間抱え込んだ関係銀行にとって、おそらく支払預金利子に経費を加算した資金コストに比し逆鞘を発生させる結果になったものと考えられる。

商銀は昭和2年末時点で資本金54万円、払込高41万2500円、支店数5（日置、城南、宮田、河原町、古佐）、代表者川端伊²²⁾之助であった。町史では商銀は「昭和五年頃より次第に営業不振に陥り、整理中」（篠p60）とするが、現実にはもっと早く、既に3年5月26日には「臨時総会を開き、資本金を二十七万

22) 『銀行総覧』34回S2p272, 280

円に半減して不良資産を売却し、更に二十三万円に増資して其総額を五十万円とし、同時に重役の改選を行った」(S3.6Op96)として「新頭取に大和曲川の太素封家堀楯熊」(S3.6.1S)就任が報じられている。不良資産の内訳は末詳ながら、少なくとも商銀は減資額相当の償却損を抱え、表面上の不良債権額は数十万円規模にも達していたことが判明する。4年10月時点では「同行ハ既ニ半バ睡眠状態ノモノナレハ資金ト見ルヘキモノ殆トナク、重役中ニハ相当資産家アルモ寧口逃腰ヲ構ヘ居ル為メ愈々行詰リ、二十三日重役会ニ於テ休業モ亦己ムヲ得サル旨決議」(窮状S4.10.24)した。そして5年4月に日銀は「同行預金ハ五割程度ノ価格ヲ以テ売買セラレ銀行ニ対スル債務ト相殺セラレ居ル為メ…自然清算ノ歩ヲ進メツツアリテ結局解散」(窮状S5.4.26)するものと判断した。5年8月和議申立、6年2月5日和議確定したが、7年7月29日の総会で、なぜか遠距離の川辺郡伊丹町の伊丹銀行(S2時点で資本金50万円、払込高20万円、支店なし、代表者武内利右衛門)との合併がほぼ決定したが、「極めて一部の株主と債権者の同意を得ることが出来ず、遂に不調となり」(篠p60)、8年7月26日の臨時総会で解散を決議し、9月30日任意解散が認可された。(遷p298)篠鉄社長を兼ねていた米村文吉商銀専は4年10月29日日銀に呼ばれた際に「<商銀>重役ハ今日迄ニ銀行ノ為ニ相当ノ犠牲ヲ払ヒタルコトナレバ此上私財ヲ提供スルコトニ就テハ歩調一致セズ、到底纏マル見込ナク中ニハ銀行解散説ヲ唱フル重役モ有ル位ナリ」(窮状S4.11.1)と苦渋の胸中を告白したが、『多紀氷上人名鑑』が「昭和六年実業界を引退して閑地につく」(多p262)と敢えて穏便に表現したのもこの商銀破綻事件の反映であろう。同様に北河内村「信用組合ノ預金二万円ニ対シ…予テ個人保証ヲナシ居リシ」(窮状S4.10.24)商銀常の北山繁太郎(信用組合長を兼職)も、「同組合ニテハ銀行ノ内容不良ナルコトヲ知り之カ扨戻ヲ要求シタ」(同上)ためか、兼務していた村議を4年引退、7年郷里を出て大阪へ移住するなど、引責辞任したと見られる。こうした商銀破綻を受け、篠鉄でも社長米村文吉が引責辞任した。

伊藤破綻の影響は商銀だけでなく、篠鉄ではあまり表面化しなかった篠銀、

137Bにも当然に波及したと見られる。かつて日露戦争後にも篠山で「投機熱」が沸騰したことがあり、「電信ヲ利用シテ相場ニ加ハリ、一村内ニシテ数万円ヲ失ヒ資産家ノ急ニ倒産セントスルモ少ナカラズ」と「一攫千金ノ投機心ノ勃興シテ蔓延」(同上) したと報告されている。大戦景気の際には狭い篠山町に「公市社債及諸株式売買金銭貸借並信託業」(T9 銀p61) を目的とする篠山商²³⁾事なる証券業者も存在し、137B専の樋口達兵衛も遠く、尼崎城内土地取などを兼務したことも、この時期篠山町の投資ブームの反映と考えられる。

137BはT10/9期ローカル銘柄な播鉄の2,000株もの大株主(篠銀も1,400株)として登場するが、9年時点の137Bの持株(勸銀100, 興銀187, 朝鮮殖産銀行450, 百三十銀行180, 合計917株, 株T9)から窺える持株方針との断絶が顕著である。さらに播鉄の再建のために、債務の株式化手法を駆使して新設された播丹鉄道でも14/3期137Bが1800株で12位の大株主となっている。

篠銀に至ってはより投資適格性を欠く播水900株をも所有したから137B, 篠銀も播鉄, 播水株等を担保に伊藤らに融資し, 伊藤の破綻により代物弁済で担保株を取得したものと推定される。篠銀はその後, 「郡部小銀行トシテハ内容左程悪シカラザルモ…篠山商工銀行ノ窮状世間ニ知レ渡リシ結果一般預金者ニ多少不安ノ念ヲ与ヘ」(S5.2.10付日銀) たため「前途に不安を感ずるに至」(同上) った篠銀は6年1月「債権債務を百三十七銀行に譲渡し」(行p242), 有馬郡の営業を譲渡(行p238)した。この際に篠銀は「其他ノ資産負債ハ整理会社ヲ設立シテ之ニ譲リ」(S6.2.25付日銀), 「整理会社設立後ハ右貸付金ヲ肩替リセシメ, 極力回収ヲ計ル予定」(同上) だったが, 篠山興信と考えられる。篠山興信(株)(名義人は取寄藤幸之助=篠銀頭)は8年3月末1470株の播丹株主(137Bも1800株)となっている。清算のための整理会社でありながら, 播丹持株が永く同数で推移するということは, 株式に市場性が乏しく, 売ろうとしても容易に売れなかったことを意味しよう。しかし播丹よりさらに規模が小さく, 市場性が皆無に近い篠鉄株では大軌のような買手も期待薄で,

23) 前掲『多紀郡誌』p200

24) 資本金5万円, 本社篠山町ノ内河原町, 取坂部啓之助(神取30株、S2/3篠鉄50株主)

播丹鉄道株の処分以上に困難であったと思われる。数少ない篠鉄株式の引取先として注目されるのは篠山自動車220株、植村新之助²⁶⁾50株らのグループである。植村は福住村、村雲村など、園部方面への交通整備に熱心で、篠山電気鉄道却下後の14年7月26日城東自動車と福住商事自動車部を統合して篠山自動車を設立したが、昭和2年9月直営バスを開業する篠鉄への何らかの意図を込めた経営参加であろう。

篠山の諸行のうち最後に残った137Bも17年4月丹和銀行（現京都銀行）と神戸銀行に京都府下、兵庫県下の店舗を分割譲渡して解散した。（行p238）

VI むすびにかえて

4年12月15日再び前社長の末正が相談役から現役社長に復帰して陣頭指揮をはじめ、以後も一時退任した時期もあったが結局会社解散までトップの座にあった。この末正復帰の背景にはやはり湊西と並んで篠鉄の後盾であった商銀が破綻したため、没落傾向にある商銀系統株主の篠鉄株式を末正系で再度買戻す事態も回避できなかったと思われる。篠鉄株の相当数が篠鉄解散直前でも末正ないし湊西系によって保有されていたことを示す次のような状況証拠がある。

15年5月時点の篠鉄役員は社長末正、専梅谷昇三、取柏木穎治（S2湊西入行、S9湊西常任監就任）、細見浩三（S8は篠電庶務主任、S15.6.22付役員選任届）、18年12月時点の監は末正²⁷⁾栄蔵、古川巖（T9は湊西副支、S5湊西常）であった。18年12月30日、19年3月27日の篠電株主総会は東尻池2丁目20番地2の湊

25) たまたま播丹では大阪電気軌道（大軌）という大手のスポンサーが登場し、播丹の持株会社である播丹証券がこうした処分に困っていた金融筋等から播丹株式を安値で買い取る形を取った。

26) 福住村の植村新之助は篠山電気鉄道（資本金200万円）の発起人総代として、岡田元三郎（商銀取、魚市場取、篠鉄100株主）らとともに11年12月30日省線篠山駅前～園部駅前21哩64鎖を出願した。（前掲安保稿③）これは「<多紀>郡東方面では交通の不便を痛感し、園部、篠山間を結ぶ『園篠鉄道』の建設を計画」（篠p69）した一環と思われる。しかし篠鉄開業線及免許線（失効はT14）との平行等を理由に13年8月29日付で却下された。植村らの篠鉄株取得はT12/3期と出願中にあたり、明らかに自己の計画線と平行する篠鉄への経営参加ないし牽制の意図が感じられる。また植村らが中心となった篠山自動車は高田九兵衛（商銀常、篠鉄取）らを発起人（『神姫バス50年史』S54p26）として篠山電気鉄道却下後に発足した。かって篠鉄のライバルとして登場した南丹自動車は「篠山軽便鉄道会社の強力な圧迫にあい…経営難の為完全に行詰まった」（篠p71）ことがある。

西東尻池支店会議室で開催（S18.12.30, 19.3.27総, 文）され、発言（S18.12.30, 総, 文）した株主の内藤茂（東尻池）も、「金銭穀類及其他物件土地建物貸付」の六ノ坪合資会社（T3.4設立、武庫郡精道村）において、末正、末正治とともに無限責任社員（諸S10上p903）を務める末正一族のパートナーであった。（以上の湊西役員就任は行p249～251）

国鉄篠山線篠山口～福住間が開業した昭和19年3月21日に、篠鉄は篠山～篠山町間の全線を廃止したが、末正は最後の社長として全社員との解散記念写真（前掲安保稿②, p96）に収まって篠山を後にした。18年の株主総会で株主の伊藤定次は「彼ノ難局ヲ処理シ…在職実ニ二十有余年…今日ノ盛況ヲ呈シマシタ」（S18.12.30総, 文）と末正社長への謝辞を述べている。末正自身は解散を決議する株主総会で議長として「吾社は…大正四年九月十二日竣成開業ヲ為シ今日ニ至リタルガ、其間経営上幾多ノ難関ニ遭遇シ時勢ノ波ニ漂ヒ備サニ苦汁ヲ舐メタルモ忍耐ク自重」（S18.12.30総）したと回顧したが、この言葉は取りも直さず本意ながら「在職実ニ二十有余年」に及んだ篠鉄経営者としてよりは、比較的慎重な末正にして時勢に流され投資判断を誤ったため一銀行家として抱え込まざるを得なかった不良債権²⁸⁾の重荷への総括でもあろうか。

もとより湊西だけでなく破綻した商銀でも不良債権の明細を解明するには至らず、篠鉄関連はその一部分にすぎなかったかも知れない。しかし大正バブル期の投機筋による放漫な投資行動の咎めが永く尾を引き、その後の関係銀行の減資や整理の遠因ともなり、関与した銀行家達を苦しみ悩ませたことは間違いないだろう。

明治期の私設鉄道も多くは幹線ないし亜幹線系のため関与銀行等の規模も大きく、『鉄道時報』等の専門誌の詳細な報道もあって、その鉄道ファイナンスも徐々に明らかになりつつある。²⁹⁾篠鉄と立地条件に類似性が高い北丹鉄道の事例でも福知山の吉田三右衛門家やその関係した福知山銀行等の被った後遺症が³⁰⁾

27) 末正栄蔵は弁護士、長久取、真野土地監「末正家の一族治良左衛門四男」（銘p332）

28) 安保彰夫氏の調査によれば末正「社長が神戸から毎月3回、8日、18日、28日に篠山へ来る」（前掲安保稿②, p94）のが日課で、大正12年3月にはそのための末正社長専用の二等客車まで購入させているという。

知られているが、こうした視点からの大正期以降の鉄道等のローカルな社会資本整備と地元銀行等との癒着事例の研究は資料面の制約も多く、緒についたばかりのところ、特に明治期の鉄道金融との接続部分の解明が急がれよう。

(本稿は平成11年度科研費補助金『明治期の鉄道業に関する総合的研究』(基盤研究B, 09430015, 研究代表者野田正穂)の研究成果の一部である。)

-
- 29) 拙稿「明治30年代における北浜銀行の融資基盤と西成・唐津鉄道への大口投融资」『滋賀大学経済学部研究年報』第5巻, 平成10年12月, 「明治30年代の亜幹線鉄道の資金調達と銀行家——総武, 房総, 七尾, 徳島鉄道を中心に——」『彦根論叢』第316号, 平成11年2月, 同「明治後期の不振私鉄のファイナンス——金辺鉄道破綻と債務の株式化事例——」『彦根論叢』第319号, 平成11年6月等参照
- 30) 赤坂義浩前掲稿p74, 吉田家に関しては宇佐美英機「幕末期城下町の商家と奉公人」(同志社人文研『社会科学』43号, 平成元年)参照